



Title	先天性股関節脱臼の予防のための育児に関する研究 (1) 母親の意識を中心に
Author(s)	後藤, ヨシ子; 真島, 裕子; 西山, 千晶
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 9, pp.85-92; 1986
Issue Date	1986-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/30019
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-23T05:05:43Z

先天性股関節脱臼の予防のための育児に関する研究 (1)

—母親の意識を中心に—

後藤ヨシ子*・真島 裕子**・西山 千晶***

(昭和60年10月31日受理)

A Study on Infant Care for Prevention of Congenital Dislocation of the Hip (1)

—The Mother's Awareness of Infant Care—

Yoshiko GOTO, Hiroko MASHIMA and Chiaki NISHIYAMA

(Received, October 31, 1985)

はじめに

本来出生直後の新生児の下肢は四足動物と同様に屈曲肢位をとり、覚醒時には自由に自動伸展運動を行っている。先天股脱（先天性股関節脱臼）は先天性という名称からすべての症例が先天的な奇形に思われがちであるが、今日胎児期に発症するものは極めて少なく生後の発症例が多いことが指摘されている。日本は先天股脱の多発国といわれ、放置すれば跛行、関節痛などを生じるが、生直後から自然な屈曲肢位・自動伸展運動を保つ下肢の取り扱いの注意によって生直後多少股関節が悪くても自然治ゆし、さらに生後新たに発生する多くの症例の発症を予防しうることが10年程前から石田¹⁾によって実証されてきた。そのため従来行われてきた下肢を伸展させる育児習慣の改善が提唱されるに至り、長崎市においても整形外科医を中心に病院や保健所において新生児、乳児の正しい下肢の取り扱い方についての啓蒙活動が母親に対し行われてきた。

今回はこのような先天股脱予防に対する育児指導もそろそろ定着してきたころと思われ予防に対する母親の認識と育児実践についての実状を把握するためアンケート調査を行い分析を試みた。

研究方法

長崎市内K保健所の乳児検診に来所した生後3ヶ月から1歳前後の乳児をもつ母親を対象に先天股脱に対する母親の認識、育児法について質問紙法を用い問診にて回答をえた。なお対象数は3カ月児60名、4カ月から8ヶ月児58名、9カ月から1歳前後児37名をもつ母親149名である。調査時期は昭和59年9月から12月である。

*長崎大学教育学部家庭科教室

㈱日本ビジネスコンサルタント *長与町立長与小学校

成 績

1. 先天股脱予防に対する母親の認識

先天股脱についての認識はどのような病気か知っていると答えた母親は91.3%と高い比率であった。しかし原因について後天性または後天性+先天性によっても発生する病気だと認識している母親は55.9%と半数強であり、他方先天性だと認識している母親は19.5%わからないが24.6%もみられた。そして先天股脱とおむつと何か関係があると思っている母親は85.2%、関係ない+知らないが14.8%、実際股脱用のおむつ使用は89.9%であった。おむつとの関係は知らなくても指導されるままに股脱用のおむつを使用している母親もいるようである。さらに育児面で特に注意していることがあると答えた母親は74.6%、その内容は抱いたりおんぶしたりする時にあしを伸ばす姿勢をとらせないようにする、おむつまたは衣服などに注意するなど予防に対する適切な母親の認識がみられたが、他方何も注意していないという母親が22.1%と5人に1人の割合でみられたことは注目される(図1)。また使用おむつ別にみた先天股脱予防に対する母親の意識にかなりの差異がみられている。まだまだ股脱予防に対し母親の認識の浸透をはかる必要があると思えた(図2)。

2. 股おむつ、おむつカバーの使用状況

本来おむつ、おむつカバーの条件は通気性、防漏性の機能を備えたいわゆる「むれない」「もれない」ことにある。従来伝統的に使用されてきた巻きおむつ、三角おむつ、それにあてる巻きおむつカバー、オープン型、パンツ型のカバーは腰をくるみ下肢を伸展位に強制しやすい。このことから先天股脱予防用として新たに改良されたものが股おむつ、股おむつ用カバーである。これは名前の通り股だけにおむつをあて腰や大腿をしめつけない、いわゆる乳児の下肢を自然屈曲位、自動伸展運動を保つ上に適したものである。しかしおむつ本来の目的からいえば幾分ずれたりもれやすいという傾向があり、母親が気を配りおむつの取りかえをする必要があるようである。

股おむつの使用状況を乳児の月令別にみると、生後3カ月児86.3%、4カ月から8カ月児92.3%、9カ月から1歳前後児91.9%全体として89.9%と使用率はかなり高いことがわかった。しかし下肢の

1	はい 91.3%			いいえ 8.7%
2	後天性 52.8%	先天性 19.5%	わからない 24.6%	
3	ある 85.2%			ない 6.1% わからない 8.7%
4	股おむつ 89.9%			三角おむつ 10.1%
5	a 28.9%	b 26.2%	a+b 19.5%	c 22.1%

1. 先天股脱とはどんな病気か知っていますか
2. 先天股脱は先天的な病気だと思いますか
3. おむつと先天股脱と何か関係があると思いますか
4. 現在どのようなおむつを使用していますか
5. 先天股脱予防のために特に育児面で注意していることはありますか
 - a 抱いたりおんぶしたりする時にあしを伸ばす姿勢をとらせないようにする
 - b おむつまたは衣服などに注意する
 - c 何もしていない
 - d その他

図1 先天股脱に対する認識

1	はい 93.3%	はい 73.3%
2	ある 85.8%	ある 73.7%
3	何もしていない 19.4%	何もしていない 46.7%

股おむつ使用群

三角おむつなど使用群

1. 先天股脱とはどんな病気のことか知っていますか
2. 先天股脱はおむつと何か関係があると思いますか
3. 先天股脱予防のために特に育児面で注意していることはありますか

図2 使用おむつ別にみた先天股脱に対する認識

最も影響をうけやすい3カ月児に三角おむつ等の使用が13.7%みられることは注目されることであり、股おむつ使用の完全実施にはまだ至っていなかった(図3)。

次に股おむつカバーの使用状況では3カ月児75.0%、4月から8カ月児69.2%、9月から1歳前後児69.2%、全体として72.5%であった。股おむつ使用状況にくらべ股おむつカバー使用に対する母親の意識は各月令とも少し低い傾向にあった(図4)。

おむつカバーはもれにくい方がよいという母親の声も多く、乳児の動きが活発になり、尿の量も多くなるにつれずれたりもれやすい傾向をもつ股おむつカバーは敬遠されやすい一面をもっているとも考えられる。他方市販されているおむつカバーにはナイト用や少し月令が大きくなるともれにくいおむつカバーとしてオープン型などが販売されている。製品の表示においても先天股脱臼予防と明記されているものは新生児用のものだけであり、他の月令のものには股ぐりが広がるように形や伸縮性の面で工夫されているものはあるが「通気性あり」「伸縮性自在」「通気性ありもれたりずれたりしない」など素材について誇示する表示が多い。母親のおむつカバー購入時の着眼点も素材が1位であり次いで形であった。中でも三角おむつ等従来のおむつカバー使用群は特に形よりも素材中心に購入する比率がかなり強く股おむつ使用群の母親との間に差異がみられた。母親への指導の徹底化をさらに図ることが望まれるが、同時に先天股脱臼に対する業界の認識も今後啓蒙を促し、製品や表示の改良、改善への努力を切望したいと考える(図5)。

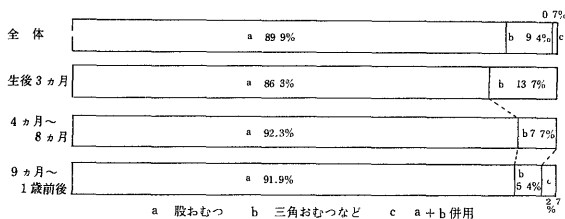


図3 乳児の月令別による使用おむつ

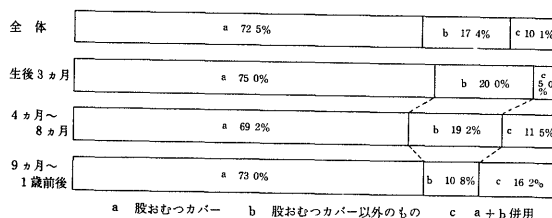


図4 乳児の月令別使用おむつカバー

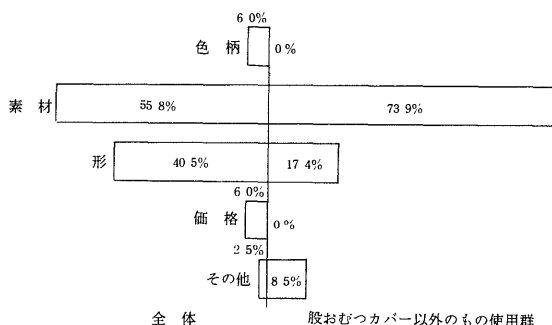


図5 おむつカバー購入時の着眼点

3. 抱っこ、おんぶ、おむつ取りかえ時の下肢の取り扱い方

a 抱き方について

先天股脱臼予防の立場から正しい抱き方について今日母親の下腹部や腰に向い合わせにして股関節を90°以上曲げてまたがるようにし首の後ろを軽く支えてやる。あしを伸ばして人形

や丸太ん棒のように横抱きにしないように股間に手を入れて抱く指導がなされている。

抱き方について図示し母親に日頃どのような抱き方をしているかを尋ねた。その結果全体の80.6%はあしを開かせ曲げた状態で抱く適正な方法をとっていた。しかし15.4%はあしを伸ばす伸展位の姿勢をとらせる方法をとっていた。

乳児の月令別にみると、伸展位または伸展位+屈曲位の抱き方は3カ月児21.7%、4カ月から8カ月児11.5%、9カ月から1歳前後児27.0%であった。抱く回数は一日数回あるいは数10回あると考えられるが乳児初期の3カ月児は屈曲優位の姿勢が特徴であり、無理にあしを伸展位にする抱き方は注意を要するが5人に1人の母親にみられた。また9カ月以後になると伸展位での抱き方が増加してきていることも注目される。そしてアンケートの結果以上により多くの母親が乳児の両あしを揃えて伸展位にして抱いている姿を事実観察した。適正な抱き方について何程かの理解はしていてもそのつど実行に結びつくためには先天股脱予防に対する真に強い認識をもつことが要求されるであろう(図6, 7)。

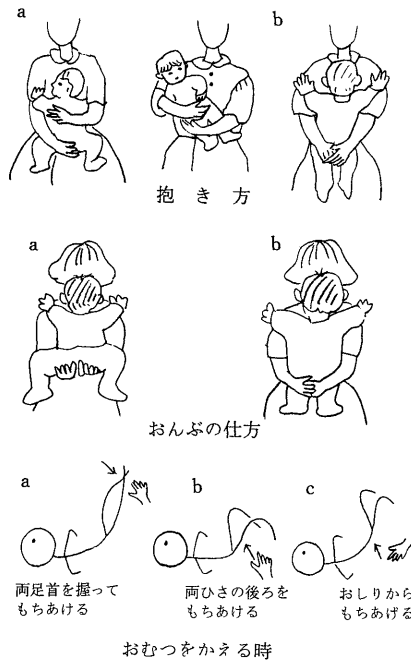


図6 下肢の取り扱い方

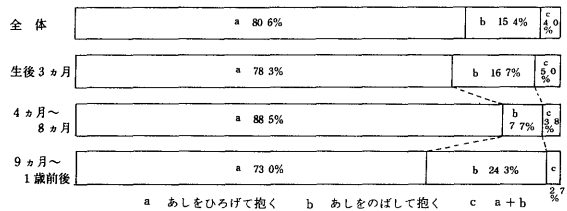


図7 抱き方について

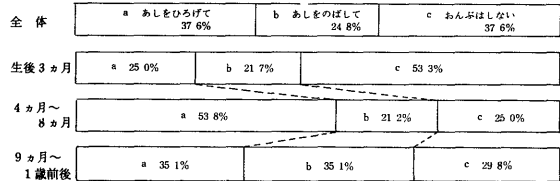


図8 おんぶの仕方について

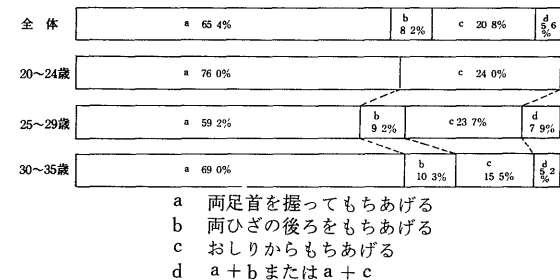


図9 おむつをかえる時の下肢の取り扱い方

b おんぶの仕方について

日本においておんぶの風習は根深く、母子間のスキンシップに役立ち乳児を安全に運ぶ育児方法としてよく行われている。おんぶの時に用いるおんぶ紐は以前に比べ現在は殆んどあしを入れる部分がついており、その中にあしを入れて使用すればおのずと下肢を開き曲げた状態となる。

おんぶの仕方について図示し母親に選択してもらった。その結果3カ月児ではおんぶはしないと答えた母親が過半数みられた。おんぶは首が固定してからと指導されているためこの時期ではまだ首の

固定していない乳児が多いためだと思われる。しかしおんぶをしている母親の21.7%はあしをのばし伸展位にして背負うと答えており2人に1人の割合であった。4ヵ月から8ヵ月児でも伸展位にしての背負い方が21.1%、9ヵ月から1歳前後児35.1%みられ、おんぶの仕方に対する母親の意識は股おむつ使用にくらべるとかなり薄いといえる (図8)。

C おむつ取りかえ時の下肢の取り扱い

乳児の排尿、便の回数は1日10~20回前後といわれ、通常2~3時間間隔で一日10回程おむつのとりかえがなされている。1ヵ月にすれば300回となり、おしりをもちあげる仕方が望まれるがその度に適切でない伸展位で行うとすれば、それだけの回数乳児のあしをひきのばすことになり軽視できないことがらといえる。

おむつ取りかえ時の下肢の扱い方について図示し母親に選択してもらった。その結果、両足首を握ってもちあげる母親は65.4%と5人に3人の割合でみられ、おしりからもちあげる適した下肢の扱いは20.8%であった。母親の年齢別では、20~24歳の若い母親の方に若干多くみられており第1子をもつ比率も高いことから、知識、経験ともに不足のためともいえそうである。股おむつやおむつカバーの普及率にくらべこういった基本的な下肢の取り扱いに対する認識は薄く、今後指導上における留意事項といえよう (図9)。

4 衣服について

乳児の衣服には短下着、長下着さらにこれをおおういわゆる「おくるみ」が基本的にある。短下着については下肢の運動を防げるものはないようである。しかし長下着になると最近は多少裾広がりになっているものも市販されているが、長下着にくらべ乳児の座高は意外に短かく、特に屈曲が強い腰には膝は下着の狭い所にあたっていることもある。それ故肌着の紐は15cm程位置をかえてつけかえるかあるいは下方の紐は結ばないように、またズボンやズボン下は股巾にまちを入れてあしの開きを防げないように工夫することが望まれている。

乳児によく着せている衣服を図示し母親に選択をしてもらった。その結果長下着では81.9%、ズボン75.2%、カバーオール89.3%とかなり多くの母親が下肢の動きを妨げないゆとりのある衣服を選んで

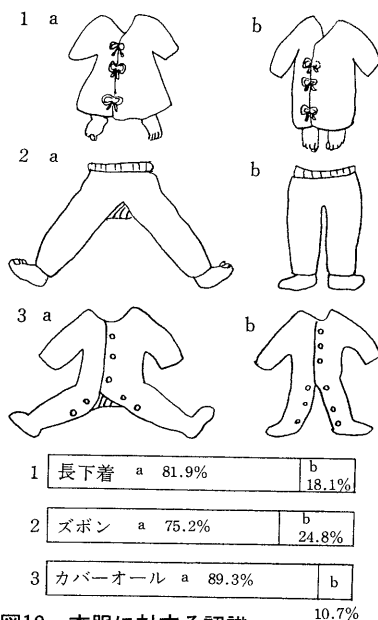


図10 衣服に対する認識

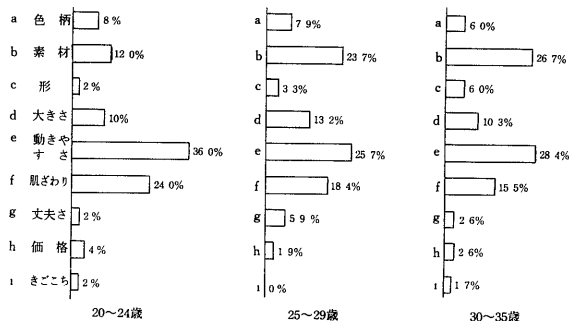


図11 母親の年齢別による衣服購入時の着眼点

いるのがみられた。このカバーオールは上下つながった形のものであり、以前はつま先までくるむタイプのもが多く出回っていた。最近ではスナップのとめ方によってカバーオールにもドレスにもなるようになってきているが出来れば上下別々のものを着せることが望まれる。カバーオールの着用頻度をみるとよく着せると答えた母親は65.4%みられ乳児の衣服の中でもかなりの比重をしめていることがわかる。

衣服購入時の着眼点であるが、動きやすさがどの母親の年齢層においても1位に選択し次いで素材、肌ざわり、大きさの順となっている。特にきやすさと素材が中でも重視されていることがわかる。また乳児服は乳児の成長が早くすぐに小さくなる。それ故小さくなったものを無理に着せ体をしめつけ身動きしにくくしがちである。大きさや形の適正なものを常に心がけて着せることが同時に望まれる(図11)。

考 察

先天股脱は人種によって発生頻度に差異があり、東南アジアやアフリカには少なく、ヨーロッパや日本に多い。同じヨーロッパでも特に局所的に多発地帯がありドイツ、イタリア、スイスなどに多いといわれている。日本においても地域によって異なり東北地方や北海道など寒い地域に多く、またこぶ巻きのようにぐるぐるおむつを巻きつける習慣のあった地方は特に多いことが報告²⁾³⁾されている。

先天股脱の主体的要因は胎内または生後の肢位の不自然さにあり、従って先天性因子、先天性因子+後天性因子、後天性因子に分けて考えられている。先天性因子は胎内ですでに高度な脱臼になって生まれたもので、生後の環境をよくしても自然治癒しない例である。家族的に脱臼しやすさ、骨盤位分娩であること、女性に多いなどともいわれている。先天性因子+後天性因子は生直後多少股関節が悪くても自然治癒するはずの症例が生後下肢を伸展させる育児習慣により自然治癒が妨げられる場合である。後天性は生後新たに発生するものである。したがって先天股脱予防の考えは後天性因子および先天性因子+後天性因子による発生または成立しないように予防することにあり、石田は生直後からの下肢の取り扱いが生後環境因子の中で最も大切であることを実証に基づいて説明している。即ち新生児は四足動物と同様に屈曲した形で生れ、安眠時では股関節は屈曲して開いたあしの形をとり覚醒時には自由な伸展運動をしている。それ故生まれたばかりの赤ん坊のあしを伸ばして巻きおむつで伸展位にすると日毎に股関節脱臼は悪くなる。しかし今度は自然なあしの形の状態においたままにしておくとも股関節脱臼は自然に治っていく。このように赤ん坊の股関節を悪くすることも逆に良くすることも容易であるという。また動物実験でも正常な幼若四足動物の膝関節を伸展位に保持すると容易に股関節脱臼が生じてくる。従来の巻きおむつや三角おむつ、伸展位でデザインされたおむつカバーや衣服は動物実験と同じく乳児の下肢を伸展位に強制していることが多く、生後新たに股関節脱臼をつくりだすことが予想される。そしてすべての乳児に自然なあしの形を防げない注意をしなければ巻きおむつを使用し下肢を伸展位に扱っていた時期に比べ著しく減少し $\frac{1}{10}$ の発生率となり、今後さらに出生時からの正しい下肢の取り扱いや育児法の改善によって一層股関節脱臼の発生を減少させようとのべている。

下肢の正しい自然な肢位の扱いは、自然に二足動物になる1歳半頃まで注意を要するとい

われており、生下時直後から、おむつ、おむつカバー、肌着、ズボン、衣服、だっこやおんぶの仕方等育児の世話全般にわたる総合的な注意が呼びかけられている⁴⁾。

このような先天股脱予防の観点から、日本人の伝統的な誤った育児習慣の改善が要望されて以来今日まで約10年を経過してきている。今回は母親の先天股脱予防に対する認識、総合的な育児法の実践についての実状をアンケート調査を用い分析を試みた。その結果、先天股脱予防に対する認識は、どのような病気であるかは9割の母親が知っていた。しかし成因として後天性または先天性+後天性によっても発生する病気であると認識している母親は55.9%であり、先天性の病気だと思ふまたはわからないと答えた母親は44.1%もみられた。またおむつと先天股脱との関係については知らないと答えた母親の中には指導されるままに先天股脱予防用のおむつを使用しているものもみられた。股おむつの使用率は89.9%とかなり高く普及していると思われたが、未だに三角おむつ等の使用が10.1%みられたことは注目される。股おむつカバーになると母親の認識は若干薄くなり、さらに抱っこ、おんぶ、おむつ時の下肢のとり扱い方に対する認識は一層低下し下肢を伸展位に強制する不適当な取り扱いが多くみられた。衣服においては長下着、ズボン、カバーオールの中からみた結果8割前後の母親が下肢の動きを防げないゆりのある衣服を選んでいるのがみられた。このように母親の先天股脱予防に対する認識は股おむつ使用等かなりの高い比率にはあるが総合的に育児全体をみた場合、今後もさらに乳児の自然屈曲肢位・自動伸展運動育児の徹底化を図ることが望まれる。他方おむつカバー、衣服にみる業界の先天股脱予防に対する認識は今後さらに啓蒙を促し、適切な製品や表示における改良、改善への努力を要望したいと考える。

結 論

先天股脱予防の観点から、従来行われてきた下肢を伸展させる育児法の改善が提唱されて以来、今日約10年を経過してきた。母親の先天股脱予防に対する認識と育児法の実践についての実状を把握するため、3カ月から1歳前後の乳児をもつ母親149名を対象にアンケート調査を行い分析を試みた。

その結果1)先天股脱に対する認識は、どんな病気であるかは9割の母親が知っていた。しかし成因について後天性または後天性+先天性によっても発生する病気であると認識している母親は半数の55.9%であり、先天性の病気だと思ふ19.5%わからないが24.6%の母親にみられた。またおむつと先天股脱とは何ら関係がない、あるいはわからないと答えた母親は14.8%もいたが、股おむつの使用率は89.9%とかなり高く、予防に対するおむつへの認識はなくても指導されるままに予防用股おむつを使用している母親もみられた。そして育児面で特に注意していることがあると答えた母親は74.6%、その内容は抱いたりおんぶしたりする時にあしを伸ばす姿勢をとらせないようにする。おむつまたは衣服等に注意するであったが特に何も注意していないという母親が22.1%と5人に1人の割合でみられた。2)股おむつ使用は89.9%みられたが、他方三角おむつ等の使用が10.1%みられ股おむつの完全実施にはまだ至っていなかった。股おむつカバーの使用は乳児の各月令別においても7割前後であり股おむつの使用状況にくらべ母親の意識もかなり薄くなる傾向がみられた。おむつカバー購入時の母親の着眼点は素材が1位であり次いで形であった。市販され

ている製品の表示において先天股脱予防と明記されているのは新生児用のものだけであり、他の月令のものには「通気性あり」「伸縮性自在」などと素材について誇示する表示が多く、しかももれないおむつカバーとしてオープン型なども現在なお販売されていた。3)抱き方において下肢を伸展位にして抱く母親は全体の15.4%，おんぶにおいて下肢を伸展位にする背負い方は24.8%もみられた。おむつを取りかえる時両あし首を握ってもちあげる母親は65.4%と5人に3人の割合でみられ、それに対しおしりからもちあげる母親は20.8%であった。股おむつ使用の普及率にくらべ、基本的なおむつとりかえ時の下肢の扱いに対する認識は非常に薄く今後指導上における留意事項といえよう。4)長下着、ズボン、カバーオールについては8割前後の母親が下肢の動きを防げないゆりのある衣服を選んでいた。

先天性股脱予防に対する母親の認識は特に股おむつ使用の高い普及率にみる事が出来るが、他方おむつとりかえ時の下肢の取り扱い方に対する配慮は非常に薄いなど、今後も総合的に育児法、育児用品含め育児全体に対する望ましい認識と実践の徹底化をさらに図る必要があるといえよう。

文 献

- 1)石田勝正：先天性股関節脱臼の予防。小児保健研究，35(6)，1977.
- 2)石田勝正：先天性股関節脱臼の予防とは。保健の科学，24(6)，1982.
- 3)鈴木良平：先天性股関節脱臼とは何か。保健の科学，24(6)，1982.
- 4)荻原一輝：下肢の自然位とその保護。保健の科学，24(6)，1982.